

2011 年 8 月 7 日

shaka

ジコチューのススメ

<目次>

1. 心を開けられる人・開けられない人
2. コミュニケーション手段に国境はない
3. 心の開閉

< 1. 心を開けられる人・開けられない人 >

世の中には2つの人種しか存在しない。心を開けられる人と開けられない人だ。そして、それぞれをさらに自分側と相手側の2つの立場に立って分別することができる。(図1)

「図1：心の解放マトリックス」

		自分の心	
		OPEN	CLOSE
相手の心	OPEN	釈迦	ピエロ
	CLOSE	スネオ	シャッターボーイ

いわゆる健全な状態にある人間というものは、表で言うスネオ（ジコチュー）に当たる。自分の心を開く事ができるこのタイプの人間は、自分にとって有利な関係を築くために臆することなく交流を深めようとしたり、時には自分が成し得た事を自信たっぷりに話す事もある。この手の人間は社交性があり、お世辞も上手いというのが一般的だが、この事が災いして嫌われるという側面も併せ持っている。大抵の人間は開き直ってそのジコチューっぷりを発揮し続ける事ができるのだが、稀にその責任を自分に押し付けてしまい、心のシャッターを閉じてしまう者がいる。この状態がシャッターボーイである。

シャッターボーイの特徴は物事に否定的で、ピエロやスネオタイプの人間の事を憎んでいる。だが、その対極に位置するはずの釈迦、いわゆる開放的で嘘偽りが無い人達の言動

には信頼を寄せ、時にはその力を自分の物にする瞬間が訪れる。ブラックジャック（手塚治虫が描いた医者）は基本的にはシャッターボーイに分類されるが、その深層にある愛情と呼べる何かが稀に人を感動させる（OPEN する）事は承知の事実である。このようにしてシャッターボーイとスネオの間を行き来したのち、何かの拍子で相手の心が開けた時に釈迦のポジションへと移行するのが常である。

ただし、ピエロだけは固有の人種と捉える必要がある。たいていのピエロは釈迦の事を偽善者と考えており、本当は自分が偽善者である事に気づいていない。また、シャッターボーイの事をヒッキーと呼んで小馬鹿にしたりすることで自制心を保とうとするのに必死である。

面白いのは対極であるスネオとの関係である。ピエロは素の自分をさらけ出せない事にある種のトラウマを持っており、スネオが持つその点での積極性に憧れを持つ。反面、相手の心が開けずもがき苦しむ姿に同情を覚えるというのだ。つまり、自分または他人に対してマインドコントロールができないという共通点が仲間意識を発生させている。もっとも、前記はピエロ側からの片想いであって、スネオ側からすれば最も毛嫌いする存在である事は言うまでもない。

< 2. コミュニケーション手段に国境はない >

昨今の通信の手段の発達とソフトバンク社の発展は目覚ましいものが有る。著者である私の周りにも多くのソーシャルネットワークや所属団体が存在するが、全ての距離感を把握し関係を維持するというのは不可能というものである。

面倒くさくなったので話を端折るが、インターネット等を使った非対面型コミュニケーションの広がりによって対面型コミュニケーションへの執着と価値が高まっている事は否定できない。例に挙げると、つぶやきと言われる **twitter** のような気軽なものから、より関係の深さを必要とする **mixi** の類、そしてさらに現実的な関係を要求される **facebook** といった「お茶」の登場である。

古来より日本人はお茶屋や茶室で息抜きをし交友を深めてきたと言うのが大河ドラマによる印象である。事実とは異なるかも知れないが、そういったリアルなお茶がインターネットという架空のものにとって代わられたという事は悲しい事なのかも知れないが、その時代においてはそこでの付き合いも含めた総合的なつながりこそが絆である。もちろん、スタバや和民でだべったり、**Round1** で歌い投げる事も重要ではあるが、それと同じぐらい「いま、何してる？」をつぶやいたり、知人とアプリで遊んだりすることが重要なのだ。その事を受け入れられない人達には残念だがシャッターボーイとなって頂くしかない。

そして、非対面型コミュニケーションを拒否する人と肯定しすぎてしまっている人同士の心理が紙一重であるという点もまた興味深い。(図2)

「図 2：非対面型コミュニケーションに対する心的ポジショニング」

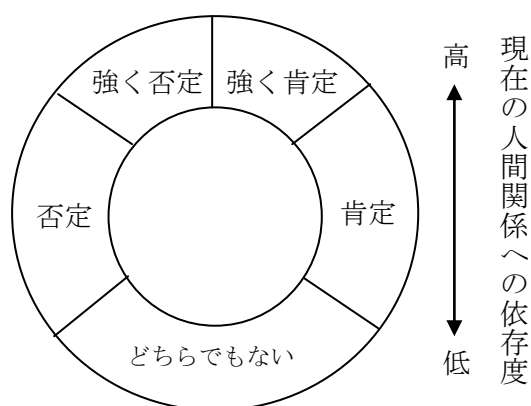


図 2 を見て頂ければ一目瞭然だろうが、非対面型コミュニケーションに対する肯定派と否定派とはまさに表裏一体である。例えば、facebook のようにリアルと非リアルの概念（境界）を取っ払おうとするものに対して強く依存するタイプの人間は、手段の違いはあるにせよ、いずれも現状の交友関係への依存度が高い人間である傾向が強いという事だ。

< 3. 心の開閉力 >

現代は一言で言うと、落ち込みやすく立ち直りやすい社会と言える。個々の人間同士のコミュニケーションは希薄化傾向であると同時にその頻度は反比例して高まっている。良い意味でも悪い意味でも頻繁に自己評価が頻繁になされ、不安になったり自信を取り戻したり妬んだり感謝したり、そういった感情の起伏が従来と比べて激しくなっているのではないか。

「覚悟」という言葉は世の中の様々な不条理や困難な状況を享受する心構えを指すが、現代人には覚悟が欠落しているのではないだろうか。この覚悟という言葉には「悟りを開く」という意味もあるが、悟りを開くとは迷いを脱する事ともある。ただ、私は覚悟のある人間が必ずしも善であるとは考えていない。図 1 の示す釈迦を目指す事は確かに合理的ではあるが、迷いながら遠回りをしてたどる過程にこそ人生の本当の楽しみが転がっているのではないだろうか。我々は生まれながらにしてジコチュー、即ちスネオであって然るべきで、釈迦とは逸脱した存在である事を覚悟すべきなのである。

心とは開けば良いという単純なものではない。無論、閉じっぱなしでもいけない。残酷な現代を生き抜くには、臨機応変に開いたり閉じたりする能力、いわば「心の開閉力」を養う事が大切なのではないかと私は思う。